7．一署一品運動の取り組みについて

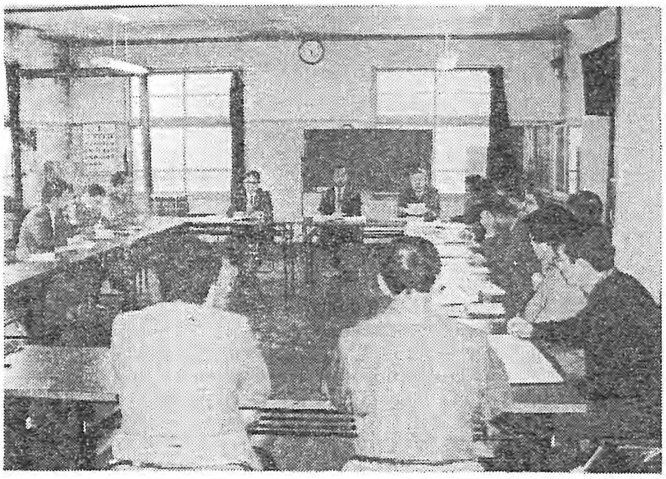
岩手営林署　　清水野輝夫

1，課題を取り上げた背景

岩手署では今年度から、資源の有効活用を図り、２５０万円の特別増収を目標に、署をあげて一署一品運動に取り組むことにしました。当署には７担当区、３事業所がありますが、当造林班では３０万円を目標に取り組むことになりました。各現場単位に、独自のアイデアで作品の作製に取り組み、販売するという一連の工程のなかで、当造林班としては、全く初めての試みでしたので、目標額には程遠い結果になりましたが、今回の取り組みが、造林班のチームワーク造りを含めた職場の活性化に、大いに役立った点に着目し、その成果の一端について発表します。

2，取り組みの経過

（写－１）　出署日での説明



４月の出署日において、一署一品運動のリーダーである次長から、この運動の趣旨及び目的が各現場主任へ説明されました。
さっそく当造林班へ伝えたところ、興味半分、どうにかなるだろう又は、誰かがやるだろうといった他人事のような気持ちで話を聞いていたようです。

現場段階での取り組みは全く初めてであり、当造林班に至っては、昭和６０年度のこの会場において、我が署で発表した『ＨＴＴ丸太』（温浴材）についても、岩手営林署が関係していることすらも知らなかったという、どちらかというと、こういう取り組みにはあまり関心のない造林班でした。

当造林班の内訳は、基幹作業職員３名、定期作業員女性３名、臨時再雇用１名、合計７名の構成です。取り組み開始に当たっては、班員の実行意識の高揚を図るため、班長を中心として造林班が自主性と責任を持って実行するようにしようと考えました。

そこで、班員に事ある毎に一署一品運動についての話題や、他署、又は他の担当区、事業所の取り組み状況等の説明をしたり、アイデアの掘り起こしに努めてきたところ、徐々に『自分たちも何かやろう、やらなければならない』というような意欲や、責任感めいたものが目覚めてきたように思います。

その現われとして、こちらから一署一品運動についての話題を出せば、自分たちから進んでアイデアの提供や、材料収集について話し合い、少しづつですが、積極的に取り組む姿勢が見えてきました。

また、作製意欲の高揚、及びアイデアの掘りおこしや作製技術の参考にするため、雨天日を利用して管内の製材所、木工所などを見学しました。

（写－２）　木工所見学

そして班員にある程度やる気が出てきたところで、全員で知恵を出し合い話し合ったのが、『何をどのように作るか』ということと、作品の作製に当たっては特定の人に片寄ることがないよう、全班員一人ひとりが、自分の出来る範囲で作製に当たり、目標に近づくよう皆で協力しようということでした。

その結果、自分たちの技術もさることながら、時間も限られているので、手間がかからず気軽に全員で出来るものから始めようということになり、実用的なものとして、とりあえず山椒と桑の木のすりこぎを作ることに、全員の意見がまとまりました。

いざ着手してみると、最初の話合いの通りには行かない事のほうが多く、技術面はもとより材料の収集や、道具類のことなどで壁にぶつかりました。しかし、試行錯誤の繰り返しの中で、良い方法を模索しながらの、意見のやり取りが、班のなかで自然に行われるようになってきました。

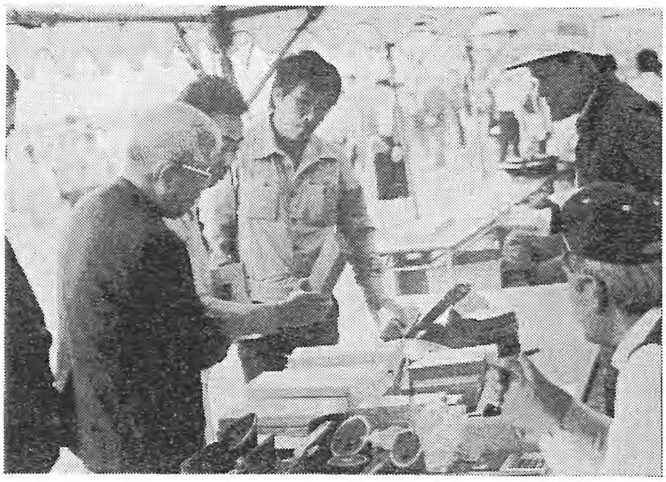
（写－３）　作品の作製風景

例えば、作業の打合せの際にも、『あの除伐箇所にはすりこぎに使える桑の木がある』とか、『刈り払いした木で使えると思うものは幾らかでも集めておこう』などと、今まで気にも止めなかったものについても、積極的に話しが出てくるようになりました。

このような中で気がついたのですが、以前は、作業の打合せや、ミーティングのとき、どちらかと言うと反応が鈍く、面倒なことは主任と班長任せというようなきらいがあつた造林班でしたが、この一署一品運動に取り組み始めてからは、作業の段取り、作業条件、安全作業などについても、各自自分の持っている意見を、少しづつですが発言するようになってきました。

また、９月の西根町農協祭り、１０月の盛岡での木材フェスティバルで展示即売し、自分たちの手作りのものが売れたことにより、一署一品運動に限らず、通常の作業に関しても、班全体に自信がついて来たように思われます。

（写－４）　展示即売風景

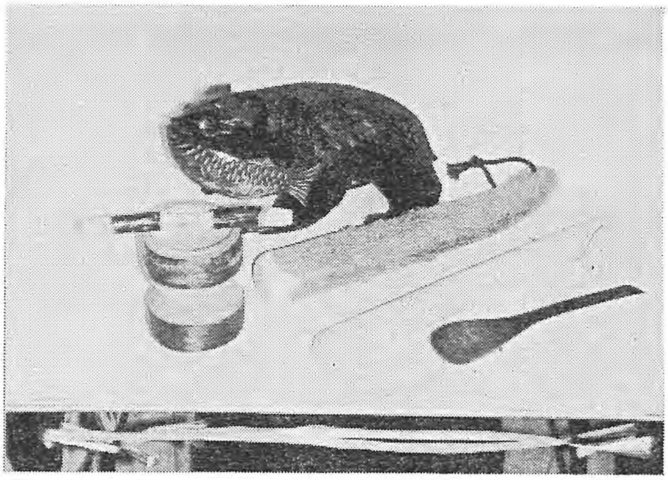


3．実行の結果

一署一品運動の作品は、すりこぎ、ペーパーナイフ、熊の置物、ミニチュアの臼と杵のセットです。この中で今回の販売に間に合ったのは、すりこぎと熊の置物だけでしたが、売上金は２万円程度になりました。

今年度の取り組みは一応終了しましたが、当初の目標額には、程遠く及ばない結果となったものの、班全体に及ぼした影響は非常に大きいものがありました。

（写－５）　作品



(1) 新しいことに取り組もうとすると、尻込みしがちな現場作業班に対し、いかに関心を持たせるかという点が最初の関門だったと思います。そこで、話しをして理解させることも一つの方法ですが、『百聞は一見に如かず』ということで、雨天日を利用して管内の主な製材所、木工所、民芸品店などを見学させたところ、皆が関心を持ちはじめ、自分の持っている意見を発言するようになりました。

(2) 作品の作製に当たって、主任はオブザーバー的立場に回り、最初から班長を中心とした、造林班の自主性に任せ、ある程度責任を持たせることにしました。その結果取り組みへの参加意識の高揚を図ることができ、より一層の自主性及び、責任感が生まれたように思います。

(3) 通常の作業面でも、以前に比べ話題が豊富になり、どちらかと言うと反応が鈍く、活気があるとは言えなかつた当造林班にも、積極性が生まれました。これによって一署一品運動に限らず、ミーティングや作業中の相互注意などの発言も、目立って多くなり、職場に活気が出て明るくなりました。

(4) この取り組みを始める前は、雨天で屋外作業ができないときの作業形態として、道具整備か安憩が一般的に行われていましたが、一署一品運動に取り組んでからは、道具整備や安憩とうまく組合せながら、作品の作製をするようになりました。

このことを通じて、自らが考え、それを限られた時間のなかで能率的に行うというように、積極的に実行するようになりました。

(5) 今年度の夏山事業において、不幸にも病気による療養者が出ましたが、その分をお互いにカバーし、協力し合ったことにより、主たる事業はほぼ計画通り実行することができました。またこのチームワークにより、昭和５６年から継続している無災害時間記録も、夏山終了の１１月末には、１０万時間まで更新できたものと確信しています。

4．まとめ

初めて一署一品運動に取り組んだ結果、本来の目的である特別増収には、程遠く及びませんでした。しかし、当造林班にとっては、新しい目標に向かって全員で一致協力して取り組んだことにより、今まで個人の中に眠っていたものを目覚めさせ、『職場の活性化』や『明るい職場造り』の面では、非常に大きな成果がありました。

今後もこの経験を生かし、業務を通じて幾らかでも収入確保を図るよう努力するとともに、安全で活気のある職場造りのためにも、造林班一同更に気持ちを引き締め、頑張って行きたいと思います。